教育実習を終えて

日本語日本文学科　4回生
江　本　恵　実

母校の中学校で３週間の教育実習をさせていただきました。思い返してみると、苦しかったことよりも、嬉しかったことや学んだことばかりの実りある３週間でした。国語の授業に関することだけでなく、子供の成長に関わる教員という仕事の重要さや忙しさを学び、また自分の甘さや自分自身の課題が明確にもなりました。そして、普段の大学生活では学ぶことの出来ない実際の現場での活動でなので、授業やHR活動以外の行事などでの教員の活動も学ぶことができました。

私は、中学３年生の国語の授業と３年Ｅ組のHRを担当しました。国語の授業では毎回学ぶことがあり、回数を重ねるごとに手応えも感じるようになってきました。50分の授業の時間配分や、思いもよらない質問が来た時の回答など、悩むこともたくさんありました。しかし、担当教員の先生から「毎回の授業を、生徒の視点に立って組み立ててみよう」と言われたことで、授業が作りやすくなりました。指導案や指導書通りに授業を進めることが大切なのではなく、生徒の反応や雰囲気をみて授業を進めることが大切なのだと気づくことができました。研究授業では30人ほどの先生が見学に来て下さりとても緊張しましたが、たくさんの先生から「生徒たちと息が合った授業が出来ていた」「生徒たちも楽しそうに学んでいた」という言葉を頂き、とても嬉しかったです。生徒からも「江本先生が笑顔で教えてくれるから授業がとても楽しい」「たくさんの先生が来て緊張するはずなのに堂々としている先生はすごい」と言ってもらえて、生徒のことを考えて授業をつくることの大切さを実感しました。

HRクラスでは、最初の３日間は「生徒の顔と名前を早く一致させないといけない」「時間の流れや教室配置を早く覚えないといけない」と、自分本位な悩みで頭の中がいっぱいで、全く生徒に目を向けることができていませんでした。しかし、３日目の帰りの掃除の時、ふとクラス長の生徒と目が合いました。その瞬間、自分の思っている以上に生徒は教師の表情や行動を観察していることに気づきました。自分のことで必死になり、周りを見ず真顔でいる私を生徒は観察していたことが分かり、そこで改めて気持ちを入れ替えることができました。常に笑顔でいることを心がけ、学校に入る時から常に周りをみて行動するようにしました。そうすると生徒とコミュニケーションを取りやすくなり、最終日にはパーティを開いてもらったり、たくさんのプレゼントもいただきました。「先生が毎日笑顔だったから学校へ来るのが楽しみだったよ」という言葉を最終日に生徒から言われたとき、自分がしてきたことは間違いでなかった、と実感することができました。

今年の春からは、夢であった国語科教員として教壇に立ちます。この教育実習の３週間で得たこと、感じた思いを忘れず活かし、歩んで行きたいと思います。生徒の目線に立ち、生徒のことを一番に考えられる笑顔でいっぱいの教員になれるよう、努力し続けていきたいと思います。

教育実習を終えて

英語英米文学科　４回生
河　野　由　希

母校の中学校で、３週間の教育実習をさせていただきました。学校を教師目線で見ることができたため、自分が生徒の頃は気付けなかった先生方の配慮や工夫を知ることができました。初めは教師としてきちんと動けるのか不安で堪りませんでした。しかし先生方や生徒たちに助けられながらなんとか無事に実習を終えることができ、学校や教師という仕事や生徒への理解がより一層深まり、自分自身の成長へと繋がった貴重な３週間でした。

実習だからこそ学べることを積極的に学びたいと考えた結果、学校にいる間は生徒と触れ合う時間をなによりたくさん作ろうと思いました。授業を通して担当クラスだけでなく他のクラスの生徒とも交流できたのはとても良い思い出です。担当した１年１組はクラス全員が助け合う素敵なクラスでした。早くクラスに馴染み生徒を知るために生徒ひとりひとりの性格や部活、趣味や好きなものなどをノートにメモしていました。日常で生徒の新たな一面を知るたびに嬉しい気持ちになり、生徒の話を聞くだけでなく心を開いて本音で生徒と向き合うことで、心を通わせられたと感じる瞬間もありました。

先生方の授業や振る舞いを研究するなかで気づいたことがあります。先生方は、生徒にものを教えるより、生徒が自分で考えることを大切にしているということです。生徒が答えに近づくためのヒントを積極的に与え、考える時間にはグループやペアで色々な意見に触れる機会を与えるなど、生徒を第一に考えていることが伝わってきました。生徒が小さい声で何かを呟いても決して聞き逃さず対応をなさっていていつも尊敬したのを覚えています。

教えるより考える授業に近づけるためにはどうすればよいのか、担任の先生に相談に乗っていただきながら色々工夫しました。具体的にはリスニングの前に導入として簡単な英語会話でデモンストレーションを行ったり、小さなクイズを小出しにしていったりしました。また、英語を嫌わず少しでも好きになってほしいという思いで外国のニックネームの話や映画、単語の豆知識など、英語の小ネタを授業に仕込みました。しかし実際私が授業を行う時に難しいと思ったことは「生徒に対する配慮」でした。私の場合、「分かりやすく内容を教えよう」と考えるあまり、意識を生徒に向けるべきであるのに授業に多く向いてしまったと思います。臨機応変な対応が必要だと改めて気づき、教師としての仕事の奥深さを実感しました。

たくさんの思い出ができましたが心に残っている一つが、最終日の学年集会でのことです。サプライズで似顔絵付きの手紙とともに「英語がちょっとだけ好きになりました。」「先生の授業とっても楽しかった。」などの嬉しい言葉をもらい、実習をさせていただけて本当に良かったと心から思いました。

学校は学びの場だけでなく、生きるために必要な力や人間性を磨く場でもあると気付きました。座学だけでは絶対に分からなかったことを実際に経験して学ぶことができたのは大きな収穫です。自分が当たり前に考えていることを他人に分かりやすく説明し、大切なことに気づいてもらうことの難しさについても知りました。先生方や生徒から沢山のことを学ばせていただきました。実習で学んだ多くのことを活かし、今後も成長していけるように努力し続けます。

教育実習を終えて

神戸国際教養学科　４回生
鳥　本　春　菜

私は、母校の中学校で３週間の教育実習をさせていただきました。中学生の時から、毎年来られていた実習生の方を見て、「私もいつか実習生や教師となって帰ってきたいな」と憧れを抱いていました。しかし、実際実習をさせていただくとなると期待はもちろんのこと、不安と緊張が大きくなっていました。それでも、先生方のご指導や生徒の温かい笑顔と声で、とても有意義で大切な時間を過ごすことができました。

私の配属クラスは１年Ａ組で、授業は１年生と２年Ａ組を担当させていただきました。実習を始める前に私は「みんなが楽しく英語を学べる授業にする」という目標を掲げました。１週目は、指導教官の先生の授業を見学させていただき、授業の展開方法やクラスルーム・イングリッシュの使い方、そして生徒の興味の引き方などを学ばせていただきました。しかし実際授業実習に移ると、考えていたような授業はできず、指導案をなぞるような形の授業になってしまい、生徒への配慮や反応に十分に応えることができませんでした。このことから、生徒の立場に立ってどこで間違いやすいかなどを考え直し、板書の書き方をよりわかりやすいように変え、説明ばかりにならないように絵をたくさん入れたプリントの作成や、アクティビティーを効果的に導入するようにしました。また、授業が終わるごとに先生が、よりよい授業が展開できるようなご助言をくださっていたので、教師の立場からの考え方もできるようになりました。その中でも先生がおっしゃっていた「英語が苦手な子でも少しでも楽しんで参加できるように、チャンツで単語テストをしたり、ゲームや歌を入れている。教師にとっては少し負担かもしれないが、生徒の笑顔をみたら嬉しい。」という言葉が今でも心に残っています。それは、実習前に私が掲げていた目標でもあったので、改めて考え直すことができ、事前の準備も生徒の笑顔を思い浮かべながら楽しくできるようになりました。ただ楽しいだけの授業ではなく、どんな力を身につけてほしいかを一番に考え、ポイントを絞って進めるようになりました。

私の、一生懸命ではありましたがつたない授業にも関わらず、生徒はいつも真剣に取り組んでくれたり、「今日も楽しかったよ。」「先生の授業で英語が好きになったよ。」と温かい言葉と笑顔をくれました。実習中は、「これでいいのかな。」と思い悩んだこともありましたが、この言葉を励みに充実した時間を過ごすことができました。

また、短い時間ではありましたが、生徒の日々の成長を側で感じられたり、近くで先生方が生徒と接している姿や、たくさんの先生方の授業も拝見し、大学では学びきれない貴重な経験をさせていただくことができました。この３週間を思い返すと、まだまだ至らない点や反省点もありますが、少しずつできるように日々勉強をし、積み重ねていきたいです。また、このような貴重な経験をさせていただいた先生方や生徒に感謝の気持ちでいっぱいです。この経験を糧として、これからの自分の更なるステップに向けてがんばります。

教育実習を終えて

史学科　４回生
小　島　　梓

５月22日から６月10日まで３週間、母校の高校で教育実習をさせていただきました。実習前は高校時代の恩師がいらっしゃる場で実習ができるという期待もありましたが、反対に生徒たちに対してちゃんと授業が出来るのかという不安と緊張の思いもありました。しかし、この実習では教育と共に、今の自分に足りていないところや今後の課題、そして気付かなかったことで、これから活かしていくことができる私の長所を見つけることが出来ました。

私は実習においてHRと教科の指導教員が違っていたため、HRは１年Ｂ組を担当し、授業実習は２年生の世界史Ａを３クラス担当しました。この３週間において私が感じたことは教材研究の重要性と生徒とのかかわりについてです。

教材研究の重要性は実習前に大学の授業等でよく指示されていたのですが、実際に授業を行ってみると自分の教材研究不足を痛感しました。以前の私は教材研究を授業における知識を蓄積する準備と考えていました。しかし、実際は知識を得ることで、授業で扱う単元の内容を取捨選択できるという時間配分の役割も果たしていたことが分かりました。このことを怠っていた私は授業実習の際、時間内に生徒に伝えたい内容が整理できておらず、時間配分がうまくできない時がありました。私にとっては成功や失敗という授業の感想ができますが、生徒にとっては一回限りの授業であったことから、教材研究不足から生まれた時間配分がうまくできなかったことを後悔しています。この後悔を通して最後までとことん追及する必要性を学びました。

生徒とのかかわりについては、在学していた時はHRとはクラスに生徒が集まって友達たちと生活を送る空間と思っていました。しかし、教師目線で考えてみると、それだけはなく日々を共に過ごすことで生徒の体調やそれ以外の変化に気付き、対応することができることが分かりました。指導教官からは「熟練の教師でも生徒の些細な変化を簡単に見つけることが出来ない。日々の生徒と触れ合う時間を大切にすることでうまく対応することが出来る」とおっしゃっていました。私は授業実習に集中しすぎて、SHRやHRなどにしか生徒と接する時間がおもっていたより少なくなってしまい、顔と名前を覚えることと３週間という限られた時間であったことから生徒たちと会話などの交流をすることに一生懸命になり、漠然とした生徒の変化は把握できたが細かいところまではできませんでした。しかし、最終日には「先輩である先生にこのクラスに来てもらってよかった！」「先生のお話面白かったです！」という言葉をもらって本当にうれしかったです。その反面、もっと交流したかったという思いもありました。このことから教師にとって生徒との交流は双方の理解につながるということを学びました。

実習期間中は予想外の準備や正解のない答えを自分で考えないといけないということで、どうすればいいのか分からなくなってしまうこともありましたが、丁寧に指導してくださった指導教員の先生方や周りの先生方、未熟な私でしたが顔を合わすと気軽に接してくれた生徒たち、そして共に頑張った実習生の支えがあって無事に実習を終えることが出来ました。今回、お世話になった方々には感謝してもしきれません。この実習で学んだ経験を私の今後の成長に活かしていきたいと思います。

教育実習を終えて

教育学科　３回生
毛　利　優　花

４週間はあっという間に終わり、ふり返ってみると楽しかったことばかり思い出します。私は教育実習を通して、教師になりたいという思いが高まると同時に、学級を運営するという事は大変だなと感じました。

その理由の１つは、様々な理由で特別な支援を必要とする児童が思ったよりたくさんいたからです。支援学級の児童、外国人児童、その他配慮を必要とする児童や家庭環境の複雑な児童などがいました。例えば外国人児童については、こんなことがありました。体育の授業の時、日本人児童は運動が苦手な外国人児童に対して、「１回だけでもバットを振ってみない？」と言いました。日本人児童は、「たくさん動くのは無理でも少しだけでも」という気持ちだったのですが、「何度もするな」という風に伝わってしまったのです。日本に来て間もないことも関係していたのだと思いますが、言葉のとらえ方や価値観が違う可能性があることに配慮する必要があることを教えてもらいました。現在、実習校は、全校生の約20％が外国人児童です。私の目標は「一人ひとりの子どもたちに寄り添える教師になる」ことなのですが、一人ひとりを見るというのは子どもたちの背景も知っておく必要があることを知りました。

また、実習校は１学年１～２クラスの規模で、学年みんなが幼馴染のような親しさだったためかケンカが度々起こり、収拾をつけるのが大変そうでした。友だちにからかわれてカッとなり友だちを叩いてしまったという事件があり、途中で授業がストップしてしまったこともあります。けれども、数時間後にはもう元通りの仲のいい友だちに戻っていて、仲直りの早さに驚きましたが、先生の声かけは重要だと感じました。

教師という仕事は、子どもへの対応や授業の準備、そして事務や保護者対応など多岐にわたり大変ですが、子どもたちの一言で、嬉しくなったり今日も頑張ろうと思えたりするのだという事を実感しました。指導教官の、「人と接する仕事はナマモノ。まずは子どもたちと仲良くなっておいで」という言葉に背中を押され、教育実習初日から腕相撲やドッジボールを通して子どもたちと仲良くなれたことは良い思い出です。日を追うごとに「毛利先生」と近寄ってきて話をしてくれる子どもも増え、授業ではクラスみんなが私の説明を真剣に聞いてくれました。最後に私が担当させていただいた古典の音読の授業では、普段恥ずかしがり屋な子どもががんばって手を挙げて音読してくれ、授業後には、「先生ががんばっていたから僕もがんばった」と言いに来てくれてとても嬉しかったです。

子どもたち、そして先生方と１か月間を共に過ごす中で、「一人ひとりの子どもたちに寄り添える教師になる」ためには、子ども一人ひとりの性格や特性を知ろうとすることが大切だと改めて思いました。また知った上で、子どもに合わせて叱り方や褒め方を変えていることに気づきました。まずはしっかり勉強して教師になることを目標に、そして子どもたちが笑顔になれるような声かけのできる教師になりたいです。

教育実習を終えて

教育学科　３回生
永　禮　咲和子

４週間の教育実習は、私にとって毎日が本当に有意義なものとなりました。最初は不安でいっぱいで悩むことや辛いと思うこともありました。しかし、温かく迎えてくれた児童や先生方にたくさん支えて頂き、悩みや辛さ以上に楽しいことや嬉しいことの方がありました。そんな教育実習で私は、「毎日を充実させてたくさんの学びをする」という目標を掲げました。授業を行い、実際に学んだ事の中から印象に残っている３つのことについて述べたいと思います。

１つ目は、「授業の準備の大切さ」です。実習に行く前に多くの大学の先生から、「児童にとっては担任の先生がする１回の授業と同じ」と言われていて、準備の大切さは理解していました。しかし、授業の時間が長引いたり、授業の着地点が分からなくなったりということを繰り返してしまいました。授業が休み時間にまで延長してしまうと、児童の集中が切れてしまい意欲的な学習ができません。そして、私自身が授業の着地点を見失ってしまうと、児童も大切なまとめを理解することができません。分かっていてもなかなか納得のいく授業ができませんでした。しかし、すべての反省を踏まえて最終日に行った研究授業では、完璧ではないけれど、納得のいく授業を行うことができました。この授業がなぜ納得がいくものになったのかというと、時間をかけて準備をしたからです。どんなことにも対応できるように時間をかけて準備をすることは本当に大切なことだと強く感じました。

２つ目は、「発問を工夫すること」です。初めて児童の前で授業をした際に、どんな答えが返ってくるか分からないことを恐れてしまって、誘導的な発問ばかりしてしまいました。その時に、切り返しや突っ込みなど発問を工夫すると、より深みのある授業になると教えて頂きました。そして、それを実践してみると、このような考え方もあるのかと児童に気付かされることも多く、児童にとってもより印象に残る授業を行うことができたように感じます。発問の仕方１つで授業全体の流れがより良いものになるということに気付くことができました。

３つ目は、「様々な指導法を身に付けること」です。指導の仕方には、いろいろな方法があり、その時の状況に応じた指導をする必要があります。実習では、全学年、全クラスの授業を見ました。すべての先生が様々な方法で授業をされており、全く同じ授業は１つもありませんでした。このように児童の実態に合わせて授業を行うために、多くの指導方を身につけることが大切な事なのだと実感することができました。

教育実習を終えて、上記以外にも学級経営や児童理解、教師の仕事のやりがいなど多くのことを学ぶことができました。その中には自信に繋がったこともあれば、課題なども多く見つかりました。しかし、教師になりたいという気持ちはさらに強まったので、実習で学んだことやこの気持ちを忘れずに、勉学に励み、今自分にできることをしっかりとしていきたいです。

教育実習を終えて

教育学科　３回生
森　本　理　花

私は神戸市の小学校で４週間、教育実習をさせていただきました。毎日とても充実していて、あっという間の４週間でした。実際に小学校で４週間過ごしてみると、大学だけでは学ぶことのできないことをたくさん学ぶことができました。私は、その中でも印象に残ったことが２つあります。

１つ目は、授業についてです。大学では、模擬授業として大学生の前でしか授業をすることはありませんでした。実習で子どもたちを前にして授業をすると、予想もしない答えが返ってきたり、作業するのに想像以上の時間がかかったりと想定外のことがたくさん起こりました。初めて授業をしたときは戸惑いましたが、回数を重ねるにつれて、子どもたちの様子を見て判断することが少しずつできるようになりました。また、同じ内容の授業を別のクラスでしてみると、クラスの雰囲気が全く違って、見えてくる課題も異なりました。クラスの子どもたちの実態を把握した上で、授業を作ることの大切さを感じることができました。私は授業をするまで緊張していましたが、実習を行ったクラスの子どもたちは積極的で明るく、楽しんで授業をすることができました。子どもたちはたくさん手を挙げて発表してくれたり、授業が終わったあとに「楽しかった！」「黒板の字が見やすかった！」「また授業してほしい！」という言葉をかけてくれたりして、授業をする度に励まされました。どの授業も、たくさんの先生方や子どもたちに助けてもらって、成功させることができたと感じます。

２つ目は、先生方や子どもたちとの関わりです。先生方との関わりからは、教師という仕事のやりがいや大変さを学びました。大変なことも多々ありますが、子どもたちの笑顔や日々の成長を間近で見ることができるのは、教師という仕事の大きなやりがいだと感じました。また、どんなに忙しくても、日々明るく元気に子どもたちと関わっている指導教員の姿は、私の理想の教師像と重なりました。また、子どもたちとの関わりから私は毎日元気をもらっていました。子どもたちと積極的にコミュニケーションをとるため、初日にクラスの子どもたち29人全員の名前を覚えることを目標にしました。２日目からは毎朝全員とあいさつを交わすことやクラス全員と話すこと、休み時間は子どもたちと全力で遊ぶことなど、自分なりに意識して取り組みました。毎日積み重ねることで、子どもたちも徐々に心を開いてくれていると感じました。日々の先生方や子どもたちとの関わりから、改めて教師になりたいと強く思いました。

この４週間の実習を通して、大学では学べない多くのことを学び、自分の強みや自分に足りないことを見つけることができました。また、今までの自分より確実に成長することができたと感じています。それはお世話になった先生方や子どもたちのおかげです。感謝の気持ちを忘れずに、実習での貴重な経験を活かして、素敵な教師になって恩返ししたいと思います。

教育実習を終えて

教育学科　３回生
栗　田　絵　梨

私は多くの学生が行っている“スクールサポーター”を行っていませんでした。なので初めての学校現場に４週間という長い期間実習することに不安を抱えていました。実習開始の約１か月前、実習校に挨拶に行き、担当の先生との顔合わせと研究授業の教科と単元決めを行い、開始までの１か月の間に研究授業の指導案作成を行いました。実習初日は雨だったので運動場での全校児童での挨拶はテレビ放送となりました。「おはようございます。」と挨拶すると、顔は見えませんでしたが各教室から大きな声で「おはようございます。」と挨拶が返ってきたのがとても嬉しかったことを覚えています。私の担当クラスは１年生でした。教室に入った瞬間児童がキラキラした笑顔で迎えてくれました。その笑顔を見た瞬間、昨日までの不安が楽しみに変わり、この子たちのために一生懸命頑張ろうと強く思いました。１週目はたくさんの先生の授業を見学させていただいたり、児童とコミュニケーションをとることを大切にしました。２週目から授業をさせていただいたり、宿題点検などもさせていただきました。最終週は朝と終わりの会も担当させていただきました。また初日の放課後から毎日、担当の先生とその日の反省、指導案の打ち合わせ、授業の練習を行いました。１か月かけて作成した指導案でしたが、不十分な点や、構成など様々な点を指摘していただいたり、私の意思を尊重したアドバイスをいただき完成した指導案は宝物になりました。私は研究授業を国語科の『いろいろなふね』のフェリーボートにしました。導入は児童に夏休みに何に乗ってどこへ行ったか尋ね、実体験から乗りものに興味を持たせることを大切にしました。また教師である私の、ふねに乗って旅行した話を写真を交えながらすると、前のめりになって興味を示したので、教師の実体験の話はとても効果的であることを感じました。研究授業の寸前、児童たちも私も緊張していたので緊張をほぐすために手遊び歌を２つしました。幼稚園教諭の授業も受講していたからこそできたことでした。授業中笑顔で一人ひとりと目を合わせることや、緩急をつけ、視覚的にもとらえさせる授業などたくさんのことを意識しながら行いました。研究授業後の反省会では、校長先生や学年の先生、他の実習生に「とても堂々としていた。」「練習が生きていた。」など様々なお言葉をいただきました。この研究授業を行うまでに学年の先生方にアドバイスをいただき、自分の未熟さや知識、経験の少なさを痛感したこともありました。しかし先生方の熱心なご指導や児童と接する姿や授業を拝見し、落ち込んでいる暇はない、１つでも多く吸収したいという気持ちのほうが上回り、最後までやり遂げることができました。最終日クラスの児童がサプライズでお別れ会を開いてくれました。音楽会で歌う曲をみんなで手をつないで歌いながら司会をしている姿や、手紙を書いてくれている姿、何より一緒に過ごした４週間を思い出すと涙が止まりませんでした。実習を終えた今、児童のことを考えない日はありません。しかし私が卒業後目指すのは教員ではなく、教員の仕事をサポートし子どもたちの未来の選択肢を広げる仕事です。実習を通し、教員の莫大な仕事量を目の当たりにしました。先生が子どもたちと過ごす時間をもっと確保し、子どもたちの個性を伸ばし、授業準備に力を入れられるよう、進学の情報や社会の様子を提供し、進路指導という仕事を軽減、また質の向上、選択肢の増加、一人ひとりの可能性を広げたいと考えています。

教育実習を終えて

教育学科　４回生
八木　美沙枝

私は４回生の６月に、約４週間自分が通っていた幼稚園で教育実習をさせて頂きました。私自身、今回の幼稚園実習がはじめてということもあり、不安な気持ちがなくならず、無事に終えることができるのか心配でしたが、何事もなく終えることができました。クラスは、最初の２週間を５歳児のクラス、残りの２週間を４歳児のクラスに入らせてもらいました。大学の授業で、子どもたちの姿や発達などを勉強してわかっていたつもりでしたが、実際にクラスに入り幼児の姿や活動する様子を目の当たりにすると、子どもたちは本当に一人ひとり違い、毎日が驚きの連続でした。

５歳児のクラスでは部分実習を行いました。この時は、折り紙を作ってその折り紙を使ってみんなで遊ぶ設定保育を計画していました。折り紙の折り方を教えるところで、自分が指導案に書いた時間内に折らなければいけないと必死になり、子どもたち全体をうまく見ることができませんでした。子どもたちは５歳児なので、理解して折ってくれると過信して、スムーズに進めることができると思っていたこともあり、計画をしていても実際にその通りに進めることは難しい事を実感しました。後日、５歳児のクラスの男の子が、「お家でお母さんと一緒に八木先生と作った折り紙で遊んだよ。」と、嬉しそうに話かけてくれました。この部分実習をする前日はちゃんと説明ができるか、子どもたちが興味を持ってくれるか、色々と考えてしまいあまり寝ることもできず不安でしたが、実際にこのような声を聞き、また、家でも遊んでくれたということに嬉しくなり、頑張ってやって良かったと思いました。

全日実習を行った４歳児では、朝の会から終わりの会まで担任の先生に代わり、一人で行いました。午前中の設定保育では、時間に追われて内容を詰め込みすぎてしまい、部分実習の時と比べ反省する点が多々ありました。どのように援助をすれば子どもたちが楽しむことができるのかというところがまだまだ勉強不足であり、結果的に消化不良になってしまいました。この実習中でわかった自分の改善すべき点や反省点を踏まえて、就職してからの保育現場で生かせるのではないかと思います。

担当したクラス以外の子どもたちからも「八木先生」と呼ばれ、一緒に鬼ごっこしようと声をかけてくれたり、毎日見る子どもたちの笑顔が本当にまぶしく輝いていました。また話しかけてもあまり話をしない子どもも、だんだん日がたつにつれて話をするようになったりするなど、変化も見ることができました。はじめ、４週間は長いなと思っていましたが、実際に行くとあっという間に終わってしまったように感じました。この期間でたくさんの子どもたちと関わることができてとても嬉しくもあり、もっと成長した姿を見てみたいと思いました。家族、子どもたち、そして実習先の先生方、大学の先生方、また応援をしてくれた友達に心から感謝しています。本当にありがとうございました。

教育実習を終えて

教育学科　４回生
倉　部　汐　理

１年間を通して、大学の附属幼稚園の５歳児クラスにて教育実習をさせて頂きました。大学卒業後は幼稚園教諭になることを目指していたので、この実習では様々なことを経験し、今の自分に足りない多くのことを吸収していこうという気持ちをもって取り組みました。上手くいかなかったことや失敗もありましたが、先生方や仲間、そして子ども達に支えられながら、自分自身と向き合い、より良い保育・教育のために自分ができること、しなければならないことは何かを考えることができました。学び多き、実り多き実習でしたが、その中でも特に、私は先生と子ども達の関係から「教師の在り方」を学びました。

私が入らせて頂いたクラスの先生は、「人間関係」と「自律」を大切にしておられ、クラスづくりをする上では「集団の力を伸ばすことは個々の力を伸ばす」という考えを持っていらっしゃいました。中でも、①活動は教師も含めてみんなで楽しむ②他人の気持ちを考える③自分で考えて行動する、という３点に焦点が当てられているように感じました。先生の保育・教育は、一歩一歩、日々前進する子ども達を信じ、見守り、時に手を差し伸べながらも、子ども主体でそれぞれの個性を活かすものでした。そんな先生の子ども達を見守る眼差しは、優しく温かく、子ども達は安心感をもっていました。そして何よりも、先生は子ども達のことを、子ども達は先生のことが大好きで、そこには深い信頼関係がありました。

そんな素敵な先生がいらっしゃるこのクラスで、子ども達は自己肯定感をもち、お互いの個性を認め合い、助け合いながら過ごしています。先程述べた先生の保育・教育と照らし合わせて考えてみると、まず、先生が子ども達を信じることは子ども達の自己肯定感を高め、自分で考え積極的に行動することへ繋がります。次に、生活の中で個性を活かすことができるよう配慮することで、子ども達はお互いの素晴らしい部分に気付き、認め合うことへ繋がります。そして先生からの溢れる優しさはクラス全体を包み込み、子ども達の思いやりのある優しい心となっているように感じました。

この実習では、先生は子ども達だけでなく私達実習生へも温かい眼差しを向けて下さり、これから改善していくべき点の細かく丁寧なご指導を戴きました。それと同時に、私達のもつ良さや強みに気付かせて下さることでこれからの自信に繋げ、いよいよ教師生活の扉を開こうとしている私達の背中を押して下さいました。私は、先生と子ども達との関係を目にし、その雰囲気を肌で感じた時、これまで曖昧だった、自分が目指す教師像や保育・教育観が自分の中に確立したように思います。これから、この実習でお世話になった先生を憧れとし、また目標としながら、精一杯努めていきたいと思います。１年間、本当にありがとうございました。

栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程　４回生
門　脇　朱　音

私は小学校で１週間の栄養教諭の教育実習をさせていただきました。実習校は自分の出身校であったので、少し懐かしい気分を味わうことができました。実習前は、１週間という短い期間で児童との距離を縮めることや研究授業を行うことに不安を感じていたのですが、先生方の温かく丁寧なご指導や児童の明るさに支えられ、無事に終えることができました。実習を通し、学んだ中で特に印象に残っていることを２つ述べたいと思います。

１つ目は、児童と日頃からコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことが重要であることです。児童は性格や体調など一人ひとり異なるので、きちんと把握しておかなければならないと感じました。児童の普段の様子を知っておけば、体調が優れない場合にも早く気付くことができるなどたくさんのメリットがあります。実際、栄養教諭の先生は「今日は全部食べられたね。」「体調悪いの？」といった声掛けを絶えずされていました。学級担任を持つことができない栄養教諭であっても、日々の学校生活で児童のことを理解することが大切だと感じました。そして、児童も信頼関係の成り立っていない先生に指導をされても、心から理解しないと考えられます。給食指導でも、特に低学年の児童は好き嫌いで昼休みの大半を給食に費やしていました。その時も、無理やり食べさせるのではなく、「これ苦手？」「少しでもがんばろう。」と、コミュニケーションを大切にした指導をされていました。実際、私が実習中に一番難しいと感じたことも児童と接することと注意することだったので、とても印象に残っています。

２つ目は、教材研究や対象学年の特性の把握の重要性です。私は１年生にカルタゲームを使った研究授業を行いました。研究授業中は、時間通りに円滑に進めることに集中してしまい、ゲームのルールを細かく説明することができませんでした。その結果、カルタの取り合いで泣いてしまった児童が現れてしまいました。取り合いになった場合はじゃんけんやお手付きは一回休みなど、しっかり説明するべきであったと反省しています。また、１年生がカルタをするとどんな問題が起こりうるだろうといった予測もしておくべきだったと思います。栄養教諭は授業に続きがなく、１回きりであることがほとんどなので、食育の時間を楽しく学べるという印象を児童に持ってもらうことが大切だと思います。そのためには、ゲームを用いた授業を行うことが多いと思うので、明確なルールを定めることが求められると学びました。「静」と「動」のメリハリをつけ、大切なポイントはしっかり伝える様な授業づくりができるようになりたいと思いました。そして一つの教材でたくさん広げられる様な会話のひきだしをたくさん持っておくことも求められると思いました。

１週間の教育実習は慣れないことばかりで大変でしたが、大学の授業や模擬授業では学べない貴重なことをたくさん学ばせていただきました。この経験を糧にして、社会人生活でも努力していきたいと思います。

栄養教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科　４回生
櫓　木　あかね

私は小学校で１週間教育実習をさせていただきました。大変短い期間でしたが、栄養教諭の職務内容、小学校現場の雰囲気、教職員間の連携、児童たちの日常の様子など、たくさんのことを学びました。その学びの中で、自分の力不足を感じ、今後の課題にしようと思ったことが２つあります。

１つめは、「給食管理についてもっと知識を深める」です。大学の授業でアレルギー対応について、調理室での衛生管理についてなどは学んでいたつもりでした。しかし、実際の小学校現場では、ただ単にアレルギー食品を除く、弁当を持参するなどの対応をしているわけではなく、対応までにたくさんの過程を経ていることを知りました。毎日その日の献立に含まれるアレルギー食品について栄養教諭、調理員、管理職、担任と確認をとることや、本人でもアレルギーを理解しているかわからない低学年ではトレーの色を変えたり、毎月保護者と献立を見て相談したりと、何度も確認を繰り返していました。また、朝の調理員とのミーティングにも参加させていただきました。そこでは献立についての情報共有だけでなく、衛生面について気になる箇所をお互い意見交換をしたり、調理の器具の選定についても話していました。アレルギーは命に関わること重要なことであるし、調理員との信頼関係を築くためには今の知識量では足りないと感じさせられました。

２つめは、「“先生”を演じられるようになる」です。今回の教育実習で、４年生で授業を３回させていただきました。事前に指導案を作り、何度も練習して授業に臨みましたが、児童の前に立つととても緊張しました。時計を気にしたり、児童の発言に上手く返せなかったこともありました。それでも児童たちは私のことを“先生”と呼んでくれて、積極的に質問や発問をしてくれました。緊張しやすい性格ですが、せっかく食育の授業を楽しみにしてくれている児童のために、よりよい授業ができるようにこれから練習や経験を積もうと思いました。

教育実習に行く前は「実習大変かな？」と心配をしていました。しかし、とても丁寧に指導してくださった栄養教諭の方や、他にも気にかけていただいた教員の方々、何より元気で素直な子どもたちを見ていると、実習前の心配は余所に、むしろパワーをもらって帰ってきました。この教育実習で改めて教員という職業の大変さを感じましたが、それ以上に魅力的だと思いました。この教育実習で見つかった課題に取り組み、自分の思い描く栄養教諭になれるよう努力していきたいと思います。

観察実習レポート

教育学科　２回生
市　丸　真　帆

１．スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

児童との関わりからは、児童を肯定しやる気を引き出す力を学んだ。スクールサポーターとはいえ、学校現場に出ると子どもからは「先生」と呼ばれる。子どもは、先生の言葉１つの影響がとても大きく、その子に合った声掛けをすることがとても大切である。教師が良かれと思って発言したことでも子どもに不快な思いをさせてしまうこともある。だから、“この子どもは今、先生からのどのような言葉をかけてもらいたいと思っているのか”気を遣いながら助言をし、声掛けをすることを心がけるようになった。私の言葉で「もっと頑張る！」と思ってくれた時は、とても嬉しかった。

②教師との関わりから得たもの

スクールサポーターでお世話になった先生方と関わる際は、どのような小さなことでも、報告することを心掛けた。自習で午前中あるクラスを１人で様子を見させていただいた時には、そのクラスの担任の先生が帰って来られた際、午前中の子どもたちの様子、少し気になったことを報告した。また、せっかく勉強としてたくさんの先生方の様子を見させていただいているのだから、分からないことがあった時には、質問するようにした。全体の練習で１人の児童がパニックを起こして集団から飛び出してしまったとき、私はどのようにフォローしてよいかわからず、立っていることしかできなかったことがあった。その時、どうするのが正解なのか全く分からなかったため、近くの先生に、このような場合にはどのような距離でいるのがよいのか聞くと、助言をしていただくことができた。以来、学校に限らず同じようなパターンがほかの子であった時にも、助言を意識して行動することができた。

③学校という組織との関わりから学んだこと

児童は、担任の先生だけが預かっているのではないことを学んだ。学校に来ることがあまり得意ではないのか、遅刻や欠席が少し多い子が教室に入るのをためらって、廊下で立ち尽くしているのをみた隣のクラスの担任の先生が、「どうしたの？一緒に入ろう。」と笑顔で声をかけていらっしゃったり、全体での集会のとき、特別支援が必要な児童が教師に連れられて遅れて入った時、その子が通るところにいる先生みなさんが、目の前を通るときに目の高さを合わせて順に挨拶をしておられる姿を見て、気になる児童がいた場合、学年や学校全体で把握しその子にできることを全体で取り組むのだから、情報の共有が大切なのだと感じた。

２．特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

私の活動は、特にある特定の子の生活を１日付き添うわけではなく、問題を解いているときにつまずいている児童がいれば声をかけて一緒に解決したり、クラス全体の補助をしたりした。だから、児童が

活動していない、担任の先生が児童に説明をしているときは一緒になってその説明を聞かせてもらっていたため、授業の流れを毎時間じっくりと見させていただくことができた。展開に入る前の興味を惹く段階である導入部分の作り方として、児童の経験から自由に発言できる内容にすることや、児童が興味を惹く内容にすることなど、授業で習ったことを実践されている姿を見て、このように話すとそのような反応になるのだと多く学ばせていただいた。また、体育などでは、児童が主体的に準備や片付けができるようコーンに完成形の写真を貼っておくことで、すぐに確認してまた作業に取り掛かることができる、など、視覚的な援助を施す仕掛けも学ぶことができた。

3．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

このスクールサポーターで学んだことをぜひとも将来教師となって自分のクラスを持った時に活かせるようにしたい。自分のクラスに、学校に来にくい状況になってしまった児童がいたり、対処の仕方がわからない児童がいる場合は、１人で対処法を考えたり行動してみることも大切だけれど、学年や学校に報告して、全体で見守ってもらうようにしたい。また、子どもの関わりとして、児童のやる気を引き出すような声掛けを活かしての授業展開をしたい。児童が「私の意見も聞いてほしい。もっと発言したい。」という気持ちにさせられるような発問を心がけたいし、児童が困っている時には、どんな声をかけるのか慎重に考えて声をかけるようにして、児童との信頼関係を築いていきたい。

4．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

私の場合は、「テスト前は無理しないでくださいね。」と気を遣っていただいたり、急な学校の行事が入った場合にも快く休みにしていただけたりしたので、学業との両立が困難だとは感じたことがない。

5．２、３回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？しませんか？またその理由を記述してください。

来年もスクールサポーターに応募しようと考える。スクールサポーターでの活動は私にとって唯一本物の学校現場を知る機会であったし、体で小学校という空間を感じることができるとても貴重な時間であった。スクールサポーターで現場を見て、改めて、学校で働く先生方の仕事の量は多く大変な仕事であることを痛感した。しかし働いていらっしゃる先生方は子どもと関わる際とても生き生きとしていらっしゃったので、大変な仕事ではあるけれど、でもその分その仕事に誇りをもって、充実感をもって働いているのだとも感じた。だから私は、やっぱり小学校で、子どもたちに教育をしたいし、子どもたちとともに私も成長していきたいと将来の目標の再確認ともなった。このようなことを考えさせてもらえるのもスクールサポーターに参加したからこそである。来年度は教育実習を控えた年であるから、気持ちの面だけではなく、授業の作り方など技術的な面からもさらに大きな学びを得たい。

6．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

私が一番印象に残っている出来事は、音楽会である。私はずっと３年生で活動させていただいている

ため授業や休み時間など、ずっと３年生と一緒に過ごしてきた。その中で、秋になると音楽会の練習も見せていただくようになった。３年生は初めての２部合唱に挑戦だったので、始めアルトパートは音程がとりにくく、アルトがとれるようになるとソプラノがアルトにつられて…となかなか上手にはもることができなかった。また合奏でも、何度も何度も同じ箇所からやり直しをさせられ、中には先生の話を聞かない子も出てきた。私が小学校の時も何度もやり直しをさせられてとても嫌だったな、と懐かしい気持ちになった。しかし、見る立場になって分かったことは、先生も手を抜こうと思えば別にそこまでやり直しをさせなくてもいいことである。子どもたちに自分たちを追い込んでできるようになった感動を味わってもらうためにあえてきついことを言っているのだと感じた。そしてそのようにして何度も練習してきた姿を見てきたからこそ本番、大勢の保護者の前で堂々と歌い、合奏する姿を見て感動した。本気でやり抜いたからこそのみんなの晴れ晴れとした姿、私はこれからも忘れないと思う。行事を作るとは子どもが思っている以上に先生方の苦労が大きなものであると思うけれど、このように見る人にも素敵な感動を与えられる経験ができるのだから大事にしていきたいと感じた。

観察実習レポート

教育学科　３回生
吉　本　采　代

１．スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

児童との距離感のはかり方を学んだ。児童一人ひとりによって教師との適切な距離が違うことに気が付いた。困っていたらすぐに支援するべきなのか、少し様子を見て見守ることが優先なのかの判断をとっさにできなければ、児童にとって最善の支援とは言えないと感じた。その判断を行うための材料として、児童との適切な距離感を知っておくべきだと感じた。

②教師との関わりから得たもの

先生が普段どのようなねらいをもって学級経営を行っているのかを、たくさん話してくださったので、意図をくみ取りながら学級経営を見させていただけた。３年生の支援だったので、次は高学年の仲間入りだということを強調して、自分たちで考えて行動したり、決めたりする時間を多くとっていた。その成果を２学期後半から徐々に感じはじめ、自発性を育てることの重要性を改めて知った。

③学校という組織との関わりから学んだこと

気になる児童や気になることを、気軽に相談し合える職員室内で、情報を共有できたり、自分の課題に対してアドバイスをしあう先生方の姿を見ることができた。また、スクールカウンセラーの先生を活用していて、児童のために真剣な姿は、私自身も頑張ろうという気持ちを強く持つことができた。

２．特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

学級経営は計画性が問われるものだと感じた。どのようなことを１年間で身に着けさせるのかをはじめに考え、そのために必要な習慣やルールを提示したり、決めさせたりしていくとよいとわかった。私が一番その習慣の大切さを感じたことは、児童が自分で考えて行動していることが多いという点である。たとえば、ある作業が人よりも早く終わったら、「先生、終わりました。何したらいいですか。」と質問する児童は３年生では多くいる。しかし、支援に入ったクラスの児童は、黙って自分の席でできることを考えてみんなが終わるのを待つ、ということが当たり前である。これは、そのクラスのルールであり、先生の戦略である。このエピソードは些細なことかもしれないが、ここから派生してほかのことも自分で考えることができると思う。このクラスの先生は、自分で考えて行動できるようになろうと児童に対しても常に話しているので、学級経営は計画性が重要だと思った。

３．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

困っている児童がいたらすぐに支援に行くことが役目だと思っていたが、見守ることも大事な支援の一つだと知った。すぐに行ってしまうと、自分で解決しなくても誰かがしてくれると思ってしまい、受動的になってしまうので、どのように問題を解決するのか自分で考え行動するところを見守り、それでも支援が必要だと感じれば、すぐに対応できる準備をしていくことが大切だと感じた。また、どこまで

をゴールとするのかということを考えておくべきだということも経験することができた。どの児童も同じようなゴールだと思ってしまうと、指導する教師もしんどいし、何より児童がいっぱいいっぱいになり、しんどいと感じると思う。できることや理解度は一人ひとり違うことをもう一度考えて、その子なりのゴールを設定し、そこにたどり着くまでの支援をするようにしていきたい。そして、そのゴールの難易度が少しずつでも上がっていくことが、理想の形であり、児童の成長につながると感じることができたので、そのような指導ができる教師になりたいと思った。

4．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

大学の時間割で、必修は入っていないからその日にスクールサポーターの活動日にしようと考えていても、必修ではない科目で教採に必要そうな授業が入っていて、スクールサポーターを選ぶか、授業を選ぶか、私にとっては苦渋の選択だった。

5．2、3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？しませんか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？勧めませんか？またその理由を記述してください。

来年度もスクールサポーターを希望したい気持ちと、4回生になるので教採の勉強も心配だという気持ちで悩んでいる。スクールサポーターは、大学や教科書では学ぶことのできない大切なものを勉強することができ、この2年間で学ばせていただいたことは、教育実習でも大いに生かすことができたし、私の中で大きな財産となっている。教採の勉強と大学の授業とスクールサポーターを両立できるという自信を持つことができれば、ぜひ来年度も活動したいと思う。

6．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

2学期にオマーンからの転校生がやってきた。その児童は全く日本語が話せず、英語も3年間学校で学習したぐらいだということだった。私が支援に入るクラスに入ることになった。私たちの共通語は英語しかないが、担任の先生も、管理職も、私自身も、流ちょうに話せないため、言葉の壁を感じた。しかし、私よりも英語ができないであろう3年生の児童は言葉の壁も越え、すぐに打ち解けていた。その様子に子どもの柔軟性を感じ、言葉ではなく心で通じ合うことがまずは大切なのだと気付かされた。急な来日だったこともあり、受け入れ態勢が不十分であると感じた。転校生を気にしすぎて授業に支障が出るのもよくないし、かといって転校生をほったらかしにするのも教師としては心が痛むものがあると思う。イスラム教徒なので豚肉を食べることができないが、ほとんどの給食に豚肉が使用されており、白米と牛乳という質素な給食のときもある。急な話で難しいことかもしれないが、国際化がますます進むであろうこれからの時代なので、その時の想定はしておくべきなのかなと感じた。制度自体は急に変わることはできないし、受け入れ態勢を整えることも難しいと思うので、小さいことから自分ができることを探そうと思った。簡単な英語を勉強したり、日本語を覚えてもらうための手立てを用意したり、その児童のために私ができる最大限の支援を考えていきたい。しかし、その児童だけにかかりっぱなし

ではいけないと思うので、全体を常に見ることを意識して、臨機応変に対応していきたい。

7．その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

スクールサポーターは、実際の現場を知ることができる貴重な場であり、私の財産になっていると思う。学校観察実習を履修してよかったと思う。

観察実習レポート

教育学科　４回生
守　谷　奈　優

１．スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

私が行かせていただくクラスは１時間ごとに変わります。コミュニケーションが取れてきたときにクラスが変わり、学年によって支援の仕方も違うので始めはなかなか慣れませんでしたが、３年目になるとクラスごとの雰囲気が分かり、スムーズに活動できるようになりました。様々なクラスに行かせてもらったからこそ、その学年に合った支援も分かるようになりました。また、児童の中には分からないけど「分からない」と言えない子や、恥ずかしがって教師に話しかけられない子がいます。児童全員の気持ちに寄り添えるよう、教師は常に広い視野で児童の様子を観察しなければならないと感じました。

②教師との関わりから得たもの

授業を見させていただいて感じたのは､先生方は児童の思考を深める助言が上手いということです。分からない児童に対して答えを教えるのではなく考えやすくなるように言葉を選んで話をされたり、図や式をかいたり工夫していました。また、授業中と休み時間のメリハリのつけ方が上手く、児童たちもきちんと切り替えることができていました。メリハリをつけることは授業中の集中力にも関わってくるので私も気を付けたいです。

③学校という組織との関わりから学んだこと

細かく報告・連絡・相談を行う大切さを学びました。今年入学した１年生に、重度のアレルギーを持つ児童がいます。担任の先生や保健の先生だけでなく、教員全員だけでなく、スクールサポーターの私にも情報を共有し、アレルギー症状が出たときの対処法などを保健の先生が教えてくださいました。また、若い先生に管理職が声をかける様子もたくさん見ました。このように、報告・連絡・相談を細かく行うことで児童も安心して学校生活を送ることができるし、保護者からの信頼にもつながると思うので、私も教師になったら他の教員とも連携していこうと思いました。

２．特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

特別支援教育について

洗濯板を使って洗濯をして、昔の人の暮らしを知ろうという３年生の授業で、特別支援学級の、ある女子児童とペアになって洗濯をしました。その児童は集中力がなかなか続かず、早さばかり気にして丁寧に作業できませんでした。そこで私は洗濯物を絞る時「〇〇ちゃんが絞った後、先生が絞って水が出てきたら先生の勝ちね！だから一生懸命絞ってね！」と声をかけました。何気なく言った言葉でしたが、担任の先生から「集中させるのが上手いね！」と言っていただきました。特別支援学級の

児童は集中力や注意力に欠ける児童が多いので、そんな児童に対する声掛けを一つひとつ大切にしようと思いました。また、特別支援学級の先生から「指示は短く簡潔に。」と「２つのことを同時に指示しない。」教えていただきました。「立ちます。椅子を入れます。鞄を持ちます。」という風に児童が混乱しないようにするのが大切だと教えていただきました。

３．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

スクールサポーターとして活動した３年間で、授業もたくさん見させていただきましたが、学校行事のお手伝いをさせていただくこともたくさんありました。自然学校のジュニアリーダー、修学旅行の引率、音楽会、運動会、卒業式、校外学習にも参加しました。その度に児童の成長が見られて、大学の授業だけでは間違いなく得ることができなかった学びがたくさんありました。そのおかげで、学校行事の雰囲気もつかめ、先生方の準備の様子も見ることができました。教師になって学校行事の時に積極的に動いていきたいです。授業に関しても、現役の先生の授業をたくさん見せていただいたので、児童への声掛け、発問、板書の工夫などを学べました。自分が授業をするとき、参考にしながら児童に分かりやすい授業をしていきたいです。

４．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

スクールサポーターの活動は、配置校と相談すれば、活動の期間や頻度を自由に選択できるので、学業との両立が可能です。私は７月と８月に教員採用試験を控えていたので、６月と７月はお休みをさせていただきましたし、その分４月と５月は週に２回活動していました。

５．２、３回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？しませんか？またその理由を記述してください。４回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？勧めませんか？またその理由を記述してください。

下級生にはぜひスクールサポーターに応募してほしいです。理由は、大学の授業だけでは味わえない経験がたくさんできるからです。特に学校行事は、児童の成長を感じられたり、感動する場面に立ち会えたりできるので、教師を目指すモチベーションが上がると思います。また、現役の先生の授業を現場で、生で見せてもらえるので授業力の向上につながると思います。教員採用試験で模擬授業がありましたがとても役立ったと実感しています。

６．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

私は先日、３年間のスクールサポーターの活動を終えました。最終日、教頭先生から「このペンを使いこなせる先生になってね。」と筆ペンをいただきました。また、自然学校や修学旅行にも一緒に行き一番関わりの深かった６年生に最後は入れてもらい、６年生全員から大きな寄せ書きをいただきました。「守谷先生大好き」「香川で先生頑張ってね」という児童一人ひとりの言葉が本当に嬉しくて、３年間続けてきてよかったと思いました。そして、職員室で先生方に挨拶をしたとき、私と一緒に泣いてさみし

がってくれる先生がいました。大学生の私を学校の一員として優しく迎え入れてくれて、教採の時期には勉強を教えてくださったり、たくさんお話を聞かせていただいたりしました。常に相手のために行動できる先生方は私の憧れで、この小学校に来れてよかったと思いました。

7．その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

３年間たくさんの経験をさせていただきました。神戸女子大学に通ってなかったらスクールサポーターとして活動することもなかったと思うし、先生方や児童と出会うこともありませんでした。大学２回生の時、スクールサポーターを始めて本当に良かったです。